

分科会「ろうあ教育史」

―戦前の聾教職員の集団的活動について―

司会・桜井 強／新谷嘉浩 助言者・山根昭治

●司会 この分科会のテーマは聾教育ですね。このテーマを取りあげた理由はなぜかと言いますと、昨年、新潟で聾教育の分科会がありました。参加された方おられますか？2年前、広島大会の聾教育分科会では、聾教員のページ、つまり追放の問題が出されました。なぜかと言いますと、昭和の初めから口話教育が普及しました。そのために、聾教育に手話法を使うのはダメ、発声が聞こえない、子供に教えるための訓練が出来ないという事で、聾教員が追放したわけです。そういう背景があった事をまず、知る必要があるんですね。次回に続きを議論しようという事になっていました。

今日は一から始めたいと思います。戦前の聾教育、聾教員たちはほとんど、日本聾啞協会の部会役員や評議員のメンバーが中心でした。また、戦前は盲啞学校の聾教員たちは教員、訓導、助手として活躍されました。話が少しそれますが、大正13年5月、それまでの日本盲啞教育会から分離して「日本聾啞教育会」が設立されました。その会が年2回、「聾啞教育」という冊子を発行しました。日本の聾教育関係、障害、色々な分析、調査したもの、口話、手話教育の意見、また、聾児に対する考え方、指導方法などがたくさん載っています。昭和17年、68号まで発行しましたが、戦時統制で、日本聾啞教育会と日本聾学校長会、日本聾啞協会の3つの団体が統合したため、発行が廃止されて「聾啞の光」に変わりました。その日本聾啞教育協会が奈良県で開催されて、聾啞教員会の第1回研究会が開かれたが、その詳しい資料を探しても見つからないんです。過去の資料がほとんどはどこかに廃棄され、紛失してしまっているようです。日本聾啞教育大会は、当番校に持ち回り制となっていました。その年は、たまたま奈良校が当番で、4月26日から大会が行われて、翌日から2日間、聾啞教員会の研究会が吉野竹林院で開かれました。

●新谷 その場にはなかなか行く機会がない所です。この人知っていますか？高橋潔先生です。この方について簡単に話します。東北のキリスト

系の学校で学んだ方です。口話教育が普及していった時に、手話が聾啞者にとって必要であると、そういう考えを持った方です。第1回の聾啞教員の研究会のメンバーです。手まね、今で言えば手話ですね。その当日の状況についてお話しします。4つのテーマ、「優美、簡潔、正確、達意」を基に手話表現について議論しました。東京流、京都流、大阪流、東京というのは、今、岡本さんの手話ですね。京都というと、京都の手話ですね。大阪は大阪の手話、それぞれの地域の手話を比べて議論しました。その手話おかしい、あの手話おかしいという事で、お互いの手話表現を批判から始まりました。個人のイライラ、感情を出さず、落ち着いて、冷静にという事でお互いにその辺は約束を守りながら、議論が行われました。その結果、高橋潔さんのお話では、みんなが集まって議論をした、とつてもこの議論の様子には驚いた、と言っています。藤本敏文先生は活気があり、今日の集まりは良かった、素晴らしいというお話をされていました。第1回のこの会議の中に、京都の裏話を聞いた事ですが、それは大矢さんが調査したのもですが、数の表現の仕方、数詞、子供に教える時の指導のあり方、京都と大阪は対立したんですね、手話の数詞、大阪の場合は今と同じです。1、2、3、4、5・・・、このような表し方をします。京都の場合は5、6、7、8、9・・・。東京はこのように表していきます。5、6、7、8、9、10。その後から大阪流が主流になっています。東京は大阪式と同じになっていますが、京都は頑固に、昔からやり方を通して行っているんです。今も60歳以上の方はこの表現をしています。数詞についてはとてもスムーズに表しています。京都には今も昔の手話で数詞を表すおじいちゃん、おばあちゃんが多いですね。で大阪、京都の争点ですが、それについては、京都の手話の場合は、遠くからの視線にも耐えられる。見て、はつきり分かるという言い分があります。2点目は手話のスピードが速くても、見分ける事ができます。結果的に数詞5、6、7、8についても、読み間違いがすくないんです。正確に、先ほど条件の中にありましたが、その正確性と合致します。一方、大阪流は、生徒たちに計算の指導、また計算の能力の向上に抜群の力を発揮したという事です。つまり、計算や算数、レ

ベル的に強かったんです。先ほど、説明したように、大阪式の表し方であれば、この表示方法の方が、京都と比べると大阪の方が優れているという面があります。次に教示法についてです。例えば、6+7、手話で表してみてください。合わせて6、7を裏にして、この向きを5と5を合わせると10ですね。親指は5と決まっていますので、5と5をたすんです、10ですね。残りは3本指です、合わせて13になる、こういう教え方になります。京都の先ほどやった5、6、7、8の表し方では、この考えが及ばないんです。それで大阪が優れています。そういう議論を重ねた結果、大阪の考え方が勝ち、京都は負けて悔しい思いをしました。今は、5、6、7、8、9なんだと何も考えないで表す人が多いと思います。その後、高橋校長が藤井先生や大曾根先生を欧米に行かせて、指文字を学んで帰ってきたんです。その後、先生たちが会議して、指文字を普及したという経過があります。京都の場合は、その頃、口話法に転換されていました。聾の先生は要らないんだという事で、追放され、弾圧に荒れました。手話が必要なんだと、京都の先生方が頑張ったんですが、学校の方針で、手話は要らないという事になっていました。しかし、聾啞者にとっては、やはり手話が必要だった。1日目の研究会の後に、聾教育…配布した資料の中に詳しく書いてありますが、聾の先生は、生き残る道として、職業教育しかない、技術を磨いて教えていくしかないという事になりました。樋口先生は聾者は全部、排除したら可愛そうだなという事で、少し、好意的な意味を述べたかもしれませんが、もう退職してほしい、もう辞めて下さい、と校長に命令しました。その後、昭和5年、8月24～26日、京都で第2回目の研究会が開かれました。参加者21名で内容は、前からの繰り返しです。その後、第3回の研究会は開かれていない。自然消滅したのでしょうか、よく分かりません。最後に日本聾啞教育大会には手話通訳者がいませんでした。口話法の普及で、手話口話論争に参加する聞こえる先生たちが多くなった。しかし、十分に論争ができたかどうかには疑問が残ります。

●山根 全国聴覚障害者教員協議会が11年前に旗上げされました。全聴協と略しています。これが、旗上げされる前、2年間は大阪、東京、全

国20～30人集まって、2年間、旗上げの準備を行いました。規約の事とか、話し合って、平成5年、松島で全国から90人ほど集まって、大会を成功の内に開催しました。90人集まりましたね、今、140人+賛助会員含めます。健聴の先生ですが、合わせると250人くらいおります。そういう組織になっています。旗上げしてから、今年8月まで、大阪市立聾学校の前田先生も役員として、組織部長として8月まで頑張っていただきました。前田先生はもう退任されまして、松島で旗上げを援助してくれました、遠藤さんが選ばれて、私がぼうすいになった関係で遠藤さんが引き受けて、触手話、パソコンの筆記を大会につけています。聾啞者としての権利、情報保障が今までなかったという事、それを我慢しなければならないのはおかしいという事で、それを提案しまして、聾啞者の情報保障、権利保障を行うという事が1つ。それから専門性を磨くという事、どういう教育をするのか、この2つ討議するために行っております。会員140人いますけれども、全国に点在していますから、聾学校の先生だけでなく、大学とか、聾学校小、中、高等部で教えている方、そういう先生も10人位いらっしゃいます。養護学校の方が多くですね。話がそれるが、インテグレートして大学に入る方も多いです。そして、学校の先生になる方が増えてきています。そのおかげで、手話を知らないままで、学校に入る人も増えてきています。それを見過ごす事はできませんから、そういった方たちもどういうふうに巻き込んでいくか、これが全聴協の今の課題になっています。

●司会 今の山根先生からのお話、戦前の組織の現状と現在の現状、それぞれには背景があるかと思えます。

●山根 正式な名前は日本聾啞教員会、名前だけ、組織は集まり方、呼びかけの仕方、規約を作る、旗上げしていく意味なのか？3回目以降がなくなったというお話ありましたが、その理由はなぜなのかという事を含めて、質問したいと思います。

●新谷 日本聾啞教員会、この組織は完全ではないです。1回目が終了した後、2回目を開くかどうかという話があったそうです。これだけの先生の中から委員を9人、北海道代表の佐藤先生、九州代表の多田先生らを含めた9人が中心に運営

を進めていこうという事で、第1回目が終わった後に、話し合っただけです。組織という形ではなかったんですね。2点目の質問、3回目以降がなくなったのはなぜか？という事ですね。もし、3回目を開いた場合、昭和6年になります。その頃の聾教育の流れから考えてみると大阪で指文字が、アメリカに行ったという事がありまして、第2回の研究会が集まった時に講演をお願いして、アメリカの聾教育の実情についてのテーマで話してもらったんですが、その後から指文字がはっきりと公的に位置付けられた。しかし、一方には、口話教育の普及があつて、聾教員を排除していく。そうした中で、集まりにくいという事もあつて、自然消滅という形になったのではないかと私は思っています。事実、神戸の聾学校、岩本先生が首になられて、神戸の聾学校長の松谷という先生が、岩本さんを排除したのです。これで、このメンバーになられたという話です。その頃の聾教育界は、口話法がもう、全国的に主流になった時代で、手話に関する研究を行なう事ができない状態ではなかったのかなと考えられます。

●司会 愛知県聾学校、今で言えば名古屋聾学校ですが、そこにも辞められた教員、名前は土井ですね。辞められたのは昭和10年でした。その校長は橋村先生で口話主義の先生でした。そのため土井教員が首になられています。今、新谷さんが言ったように、手話に賛成の人々は抑圧され、弾圧されたんです。聾の子供に対しては同じく、手話で話してはいけないを条件で転校を許された事もあつて、転校された後、非常に苦しんでいたようです。その子が授業の中でも苦しんで、退学になってしまったという話がありました。

●岡本 昭和4、5年の時の実情があります。神戸であれば手話は使っていなかった。実態は分からなかった、その実態はそれぞれの地域で調べたらいいんじゃないだろうか。そういうテーマで話してもいいと思う。生活の様子もそうですね、どなたか退職になつても、とても可愛そうだと思う。70、80歳でも、いいんですが、そこまで行かなかった先生が首にするのは大変ショック、悲しい事だと思うし、痩せられて大変になる。それは残念な事だと思いますが、若い先生もおられた。その先生は今、どうなっているか、もっと調査をしたら

と思います。この先生も、もう高齢ですね。

●佐藤 知らない人たちもたくさんいると思います。日本聾啞協会が設立された理由とか、支部を作った理由なども話をしていただけませんか。

●司会 大正4年11月、フランスのパリの学校創立者のドレペ先生です。今日11月25日に生まれました。ちょうど同じ日に設立された後、京都で日本聾啞協会を組織するために設立したわけです。その聾啞者幹部はほとんど聾学校の先生が代表になっていました。文章的にも非常に優れているので、そこを中心にして組織されたと思われま

●佐藤 東京で創立、京都には東京聾啞学校の卒業生が集まった。一方、京都聾啞学校を卒業した生徒たちは、別に集まっていたというわけですね。東京支部は規模が大きくなった。その影響で東京から出た会員たちが、各地で支部を作った。そういう事が資料から想像されます。また、新潟の場合、東京支部にいた方がこちらに帰ってきた。東京から出た方たちが各地に支部を作っていたんだという事が想像されます。

●新谷 聾教員研究会の幹部の方たちは、山根さん、お話しされた通り、ほとんどは地方の部会の支部長とか、役員になられた方です。全国評議員会に集まって情報を交換した。協会の動きや部会を作る事などの意見を交換されていたのだらうと思われま

●岡本 1回目の大会では、色々議論をしたんですが、その中に聞こえる人、難聴の方もいたと思います。記録が色々、貯まっていると思うんですが、そういった記録などの情報はありますか？みなさんもっと古い話を聞いた、情報はある人をもっと把握したいと思いますね。記録があつたら渡していただきたいと思います。同じ聾啞協会ですよね。事務局はどこか、東京の聾学校が事務局ですか？同窓会も兼ねていますよね。人数がどんどん増えているので、十分把握できないと思います。ですから、探すのに非常に大変なんです。収集が大変なんです。お互いに、そういった情報交換があれば、もっと収集率があがると思いますので、教えてください。

●若浜 東京の地域、京都、色々、私はその辺の事は分かりません。私の知る範囲で言えば、私の親が昔、札幌聾話学校、戦争の時、帯広の御影に

引越したんです。みんなで、疎開しました。その時に色々、農業で食べさせなきゃいけないという経験がありました。今、母は86才、健在です。なぜ、学校が移転したのか、という理由ですね。校長先生は色々、借金をしたという事で、札幌の校舎は国鉄に売ってしまいましたので、校舎もなく、帰る場所もないという話は聞いています。中根さんが私の母と会って、聞き取りをしたようです。具体的な聞き取り調査はまだしていないと思いますが。

●司会 岡本さん、若浜さん。ちょっと話を戻しますが、手話について大阪と京都、東京の3つの考え方があって、その議論ですが、ポイントは何でしょうね、ポイントは…それぞれ研究するポイントは何かありますか？3地域の議論について。

●新谷 東京、京都、大阪の地域が集まり議論を重ねました。くり返しになりますが、数詞の表し方などは、東京、京都、大阪の手話の統一を条件にするというところは、史料の中にきちんと載っています。京都の大矢さんが昔、京都にいた聾のおじいちゃんの京都の古い手話の調査に行ったんです。おじいちゃん、おばあちゃんが「京都が負けた、京都が負けた」とくり返しお話をされるそうです。なぜかという、すごい議論した、手話の数詞の他に、指文字も含めて議論した、その背景があったんです。でも逆に京都の学校長の考え方は、聾の教員は要らない、不要だという事で、一方的に首にしたという事があって、手話そのものが虐げられたという事だったんです。その事を考えると、大阪が勝った、京都も勝ったといっても素直に喜べない状況であったと思います。昭和4年に会議があり、その後、41年間まったく、手話の研究をやっていないわけになります。その事を考えると、今の社会の背景を考えると、すごく進歩していると思います。

●司会 高田さんの講演を聞きまして、その中でも、昭和の初期の背景について、口話法教育が広がる危機感があったという事で、それを守るために聾教員たちが集まり、手話の統一を議論し始めたという経過があったと思います。その事も少しお話ししていいですか？

●山根 この聾教員研究会を後押ししているのは高橋先生の本当の考えは、手話との戦いではなく、時代の背景では、口話教育の流れになってい

ますね、手話が負ける、頑張れ、負けるなという意味で、集まったのではないのかなと思っています。自分達はもっと頑張ろう、という事に火をつけたような、高橋先生、その後の運動に関わっていく、その辺りの話をしてもらいたいと思います。

●新谷 実際に研究会に参加した高橋先生、東京の樋口先生、お二人の話では、口話法が広がっていく変換期に、手話を研究しなければならぬ。手話が大事だという事を聾啞者教師が集まってちゃんと討議をしよう、統一できるはずだという事を打ち出したんだと思います。その後、戦中にかけて、自然消滅してしまったのかなと思います。

●司会 時代背景が変わっていく中、旗上げされたものに光を当てて、分かってきたという事ですね。

●渡辺 全聴研の旗上げには、どんな背景がありましたか？

●山根 全聴研は11年前に旗上げをしました。戦後、聾教員が減らされた後、その後、又、教員が採用されて増えていったわけですね。口話教育といえば、子供と通じるか、と云えば、通じないんです。それが、聾の教員であれば子供と通じやすい、校長の権限でこういった教員を、教員の採用枠を広げていった、昭和40年代そういった人たちが増えたんです。昭和44年、全日本聾教員の研究会がありまして、教員達が集まって、労働の分科会が開かれた、労働の分科会、健聴者も一緒に集まっていました。聾教員が教育に困っている。今でも、差別問題はなくなっていない。それが当たり前の状況であるという事を、聞いた先生達が大変怒りを持ちまして、その報告集を回収したんですね。謝罪もしなかったんですね。で、近畿の聾啞者はそれに対して、そこで集まって、近畿の聾啞職員、懇談会を今度、開いたんです。最初は中西先生、東京も同じような懇談会をまた開いたんです。お互いに、情報交換しようではないかという事で、14年前に前田会長を中心に呼びかけをして、2年間、準備期間を経て、11年前に全聴研、全聴協を立ち上げたんです。戦前の聾教員の集まりがあったという事、その事自体がまず、聾啞者の方、分からなかったと思います。是非、全聴研の中にも、全聴協の中にも来てもらって、その話をしてもらいたいと思います。

●司会 東京、大阪、京都の手話の違いがありま

して、統一していく、という議論ありましたね。そういう経過ありますが、それについて、統一という部分では、全聴協の中ではありますか？

●山根 昔の背景と、今の旗上げの背景が違うのは、聾運動が手話通訳を入れるとか、聾啞者の権利を守る戦いをした、というのがあります。大家先生とか、貞広先生とかも非常に頑張りました。手話に対して、何と言うか、偏見という事を、聾教員の集まりにはしやすかったんです。以前と違い、集まりやすかったという背景もあったので、聾の先輩たちは非常に苦しい中で経験し、私たち今の後輩たちはそれがあって今があるのではないのかなというところでは、非常に感動しました。

●司会 研究の時に使った資料を追加してもらえると、参加したみんなも後から読み返す事ができると思っていますので、資料が何かという事をお知らせいただければありがたいと思います。先ほど、色々な写真とか、名前とか、1回目の会議、2回目の会議がどこに書いてあったものなのかを、みなさんに知らせればよかったのではないかと思います。もう1つ、広島の際に、大変よい資料作ったんです。改めて、私がこれを見ると、今日のテーマの1つは、ページした聾の先生たちです。けれども、この資料にある聾の先生たちが辞めた年を細かく調べると、昭和5年、6年、7年、8年頃に辞めたという先生の数はあまり多くはないですね、そういう関係はどうなのか？私も疑問があって調べたいと思っています。

●山根 貴重な意見、戦前の背景の話をいただきました。これをもう少し、数字を調べて、戦後、どのような聾教員が採用されていったのかという背景、また30年前、全日本聾教育の研究会が始まった資料があります。そこから全聴協にいたるまでの流れの中で、特別支援学校に変わり、聾学校が廃止される恐れが出ている。聾教員がまた、排除されるのではないかとこの恐れも出ている。学校を変えていくという要望、北海道の議員が行い、手話ができる教員が17%しかいない。これを議会で質問した事で、今年の4月から、北海道の8学校で調査をして下さい、という通達が出たんです。その後、来年度2年間かけて、北海道の中で、今までの口話法教育に手話を導入していく、何校かを指定するような動きがあります。今

後、どのように変わっていくのかという事も、歴史を振り返るだけではなく、そこから、学ばなければいけないので、今後についても、こういった声も、どんどん取り上げて、声を高めていってほしいと思います。

●司会 今の転換期、「歴史はくり返される」と言われていますので、これからも平和が続くように願っています。聾学校に行った事のないという先生、自分が聞こえないというだけで、手話が分からない先生がいるというお話がありましたね。こういった事も、くり返されるんですね。聞こえない子供が生まれる数が減ってきている。特別支援教育の問題もあります。出生率も少ない。聾学校の先生も多い、給料面の問題もある、これらがどのようになっていくのか、その展望について、もう少しお話ししていただけますか？

●山根 聾学校、盲学校も同じですが、児童の数が減っています。例えば、生徒が6～7人、教師20人とか、一般的に見ると、税金の無駄だと言われています。1億円の人件費をかけて、7人のために使うのか、今の時代はこういうような声があります。聾啞協会も団体に対して、助成金が今、無くなっています。市民の分かる事業でない、仲々助成金が出せないという自治体が増えてきています。そういう時代になっていますので、聾学校を統合していく、非常に厳しい時代になってきています。こういう状況の中でも、聾学校の先生はのんびりしている。危機感がない、それはつまり、首にならないんです。他に行く事ができるから、大丈夫。こういう面、やはり、聾の教員だけ、今後、手話を導入する問題についても大切ですが、聾学校が生き残れるかどうか、という事が1点。もう1点は教員の免許も見直しになります。特別支援教育になると、免許は広く、浅くという考え方が出されていますので、下手をすると、聾教育の専門性が低くなる危険性もあります。こども含めて、できれば、聾史学会の中でも、今後の課題は、明確に打ち出していけば、外から見てもやっぱり分かってくる、そういう取り組みが、私も含めて、少し調査もがんばっていききたいなと思います。

●司会 手話は色々違いがあり、口話の流れがあり、それに対して危機感があり、それを守っていくために、聾の職員が集まり、議論して統一して

いくという目的があったというのが1点。もう1点は、口話教育が主流になっても、聾教師を首にする、排除するのではない、その辺の考え方を知りたいと思います、

●新谷 聾教育は明治11年、公教育として開始されました。京都、東京から始まって、全国各地に学校が作られていきました。明治40年、盲・聾学校に分離して、東京、京都、大阪3ヶ所を中心にして行った。その後、大正天皇の命を受けて行われた事ですから、盲・聾一本の学校を建てろという事ですが、昭和になってから、法律が整理されて一歩進んで、盲と聾の子供を学校に通わせる、学校に入れる、という法律が変わってきた。つまり、手話か口話かという事はさし置いて、とにかく学校に入れる、聾の子供にも教育する6歳以上は義務教育として教育を行う。戦前はそういったものが無かったんです。それが、聾児に口話教育を行うという方向に変わったのかもしれないけれども、聾啞者のために教育を行うという考え方があった。そこから、口話法になっていったという経過はどういうものか、分からないが、敗戦後、義務教育の法律が整備された。そこで変わっていったという経過があります。これから特別支援教育が始まるが、過去に盲・聾を分離したが、再び統合されていくのか、その辺、疑問に思います。

●山根 少し補足で説明をします。戦前から義務教育の流れがあつて義務化されてきました。費用がかかる、費用を安くする、という事であれば、学校を建てても、通えない子供が多かった。それでは、子供が集まらない。29年に入ると、財政的な根拠も作られた、国が責任を持つものとなった。そういう考え方が広まったおかげで、人が集まるようになった。親も安心して、子供を預けられるようになった。昭和30年を過ぎると、その頃をピークにして、又、下降線を辿ってきているけれども、親から見るとやはりよいものという印象は持っていない、夢が無い、育てない、まあ、普通の学校に通わせる、学校経営は国に任せ、自治体任せしている。聾啞者のコミュニティーをきちんと守っていく必要があるという運動がこれから大切になっていくと思います。

●岡本 今日のテーマ、とても重要だと思います。みなさんそれぞれ、追放された事は知らないで

しょう。同じ聾啞者同士でも知らなかったですね。自分の父も同じです、大変苦勞しました。聞こえない事を馬鹿にされたり、差別されたり、苦しい思いをしてきました。教育もないし、技術の仕事をしてきたんです。という事を父は教えてくれました。母もそうです、今も自分の子供もそうです。学力についてもあまりありません。まずは、学力よりも生活力をつける事が大事なと思うんです。やっぱり、聾啞者の中でも、例えば、公的な聾教育とか、聾の先生が集まったという事は分かりませんが、140人の全聴協の先生たちは賛助会員も入れると200人というお話されてました。そういった事も、わずかしか分かりませんね。どうやってその背景があつたのか、という事をきちんと歴史、背景、残っていませんので、今日、聞いた事は、自分の中にも、今後、色んな所でもっと、発信していった方がいいんじゃないかなと思います。何も発信する事がないと分からない、仮の形でもよいので、人数だけでも、かまわないので、今みたいに情報を作った事は、きちんと発信したらよいと思います。そうすれば、今の聾教育の問題もあるので、こういう所に出す事ができると思うんです。情報を出したところで、それぞれ修正をして、これで終わりではないんです。見えない所がたくさんあると思うので、色々な情報を集めて1つになって、もっと修正していけたらよいと思います。

●斉木 手話とかの情報や詳しい事、色んな事、やはり保存が必要かと思います。口話は聞こえる人に合わせた教育方法ですね、高橋先生の考え方をもっと広げて、大切にしていきたいと思います。改めて聾の教員の方が排除された様子、こういった事実があつたという事を認識する必要があると思います。聾の子供の立場でも聾の教師は大切です。聾の教員が辞めたのは昭和の初めに多かったという資料、例えば、給料が安いとか、健聴と比べると待遇が悪い、というような資料がほしいのです、低い立場で働いていたという現実もあると思うが、頑張り続けた。そういう努力があつたという事を、みなさん知る必要があると思います。一番嬉しかった事は、写真がはっきり出ていた事です。知っている先生がほとんどいて、非常に嬉しかったです。知らない先生も何人かいましたが、全部知りたいので、そういう組織があるという事

も分かりました。

●荒木 私は初めて、聾の歴史について聞いたのは、中根伸一さんの講演でした。今回はこのような大きなテーマの分科会に参加して、勉強になりました。この名簿の資料は大変よいですね。

●渡辺 聾教育の分科会は初めてでした。今はお手伝いとして、聾の子供に接しています。小4位の子供で、私は手話で「どこの学校か」聞くと、難聴教室に通っているんですね。で、学校は楽しい？と聞くと、首を振るんです。暗い人ばかり、聾学校に行きたいって言うんです。やはり一番問題なのは、人工内耳で私は反対で人権問題です。例えばラグビー、野球とかバスケットとか、やる場合外さなければならぬ事があります。好きなスポーツをしたいけど、人工内耳があるからできないという事があるので、問題です。そういう意味で私は反対です。今日のスライドで聾教員だけが集まって、会議したと聞いた事はあるんですが、今日のようにどういった内容であった事を知ったのは初めてで、感謝しています。

●若浜 戦前の聾教員、本当に今では考えられない。昔は連絡も不便で、今は携帯もパソコンもあります。情報収集、簡単ですが、昔は大変だったのではないかな、どうやって集まったのかな？不思議に思います。手紙も時間かかりますね。そういう事を感じながら聞いていました。集まれたという事は、やはり、聾の団結、心の団結があったから、こういった会議もできたと思います。聾の歴史と言いますか、名前も書かれています。今は、ほとんど亡くなっている方が多いと思います。その息子とか、奥さんとか、語り継がれているのかもかもしれません。そういう方たちからも、聞き取り調査という形で、収録できたら、保存する事もできると思います。

●宮内 お話を聞くだけでしたが、みなさん研究されて、本当にすごいと思いました。例えば、この文書みたいな古い資料、読めない漢字、こういう資料をきちんと調べて、研究をしているわけで、感心しました。聞けてよかったです。

●辻 戦前の聾の先生の集まりがあったという事は初めて聞きました。滋賀県にもそういった情報は全く無かったです。山根先生の助言も、全聴協というのが、全く滋賀にいと知る事はできません

でした。初めてこういう話を聞いたので、自分もこれから普及していきたいと思います。滋賀県の中にも聾の、高齢の先生はもう辞めていますね。今、実際に採用も無い状況で、先生も減っています。今後については危機感があります。でも、その中でまったく考えていない先生も考えている先生もいます。特別支援の転換期に危機感を持っています。もっと国に対する要望も出していかねばと思います。やりますと滋賀の場合は言っていますが、本当にやるかどうかは分からない、一緒に取り組みを頑張っていきたいと思います。

●石黒 戦前の教育の経験があると、私のおじいさんは言っているんです。小さい時亡くなってしまいましたので、おじいさんの事は知らないんですが、おばあさんから話を聞きました。採用されてから、辞めるまでの間、色々な話を聞きましたが、21の時くり返しくり返し、話を聞かされました。それが頭に残っています。生まれつきの先天性の聾啞者だけではなくて、聞こえる子もいて、自分の子が聾児で、今年私も聾教育の歴史を本に書いたんですけども、分からない事があった時には、桜井さんから応援いただきました。ありがとうございました。という事で、でも、私が書いた歴史は当たり前前の歴史を書いたわけで、みんながよく分かっている歴史ではなくて、歴史の中の肉となるような話をいつも聞く事ができますので、大変、楽しみにしています。今日、高田さんが話したように、聞こえない人が自分たちの歴史を記してほしいです。

●司会 今後の課題として、みなさんからいただきました事を、歴史プラス活動、つなげていく事が大事だと思います。山根先生からも、過去の組織について、改めて報告をしたいと思います。大変、苦勞された先輩方の話をまた、伝えていきたいと思います。自信を持って、今後の展望につなげて下さい。

●山根 大変勉強になりました。根本さんの話、リアルな話でした。昔に戻ったような気がします。また参加したいという気持ちを持っていますので、よろしく願います。特に全聴協、知らない人が多いですから、自分の仕事に一生懸命になるのもよいですけど、歴史も含めて、勉強していかなければならない事、大事だと思いました。